

る一人である、別枝君は篤學新進の士である、希くは猶一層の努力を日本もしくは東洋の研究に注がれん事を祈らざるを得ない、しかし恐らく本書は地理學を講義する人によい参考となるであらうことを信じて其發行のよからん事をいのるものである。(藤田)

○支那邊疆概観

東亞經濟調査局 東亞小冊第十六
定價五拾錢

菊判一六四頁假裝の手頃の冊子である。外蒙を除いて新疆、西藏、雲南の經濟及政治を要領よく纏めてあるから、此方面の新知識に乏しき者にとり絶好の参考書である。参考書の多く掲げられてゐる事も便利である。極く僅かであるが此類の書として珍らしくも飯本氏、佐藤氏など地理學者の著書が引用されてゐる事も吾等地學の徒にとつて嬉しくない事ではない。百頁以下は附録で主要な新疆、西藏、雲南に關係した外交條約が列擧され内容を一層具體化せしめてゐる。

(南太郎)

雜報

○アラビヤ・マスカットへの日本品 アラビヤのマスカットは一九三三—一九三四度に於て印度、伊太利、英本國、アフリカ、アデン、米國、獨逸、日本等と取引してゐるのであるが、綿布類に就てみると、

日本 三六二、五七九 ルビー 印度 一一七、六七四
英國 二八、一九〇 其他 二一、二六〇

であつて、日本は第一位となつた、前年では日本は重要輸入國でなく、日本を含む其他諸國から合して三十五萬九千留比に止まつたが、一九三三—三四年では一躍して日本三十六萬餘留比となり、印度は第二位に下つた、マスカット市場に於ける日本のかゝる脅威的成功の眞因は、日本商社が同市場の特殊性と實需とにつき不斷の研究をなし、同地方の風俗習慣嗜好等に熱心な研究をすゝめた結果である。マスカット及びスマトラのバサーといふバザーには必ず日本商品が出てゐてマツチに至るまで日本品である、日本のセメントは安いといふので賣行がよい、恐らく一九三四—三五年度は日本よりの輸入は増加するであらう、日本品の進出に對し、凋落したのは英國である、英國品では蓄音器、酒精飲料、食料品を除いて、其の原價の高いこと、商人が地方的事情を研究しないことのために段々と衰滅してゐる、印度の工業能力でも日本の様に廉價で實用向な商品を生産することが出来なから、印度の商品も日本に押され氣味だ。

右は一九三五年三月の印度商業通報の記事からの索引である、日本人も世界のいかなる市場といへども、努力して開拓しなくてはならぬ。

○マルガリン工業の統制

歐洲の工業が進み、都市隆

興し工業労働者が急増しだしたと同時に、一般庶民の營養物にも變化を來し、純農産物のみにては國民の需用を充たし得ざるに至ることは自然の勢である、自然將來の日本に於てもあらゆる食料品が工場の産出するところとなるを免れないかと考へられる、勿論それが國民の幸であるか不幸であるかはわからないけれども、人絹工業が天然絹糸工業の有力な競争になつたやうに、バターに對するマルガリンも亦其一つのかゞやかしい實例である。

一八六九年佛國化學者 *Mage Mouriés* は始めてナポレオン三世の命を奉じてバター代用品の製造に著手したが失敗したが、やがてバターの自然製造法に多少の改革を施すことができた、さうしてその代用品が市場に安價に供給するゝや當時のバター市場を震撼させたが一般にはその實際効果を疑ふてゐたところ、和蘭の一寒村オスにバター販賣商を營んでゐたアントン・ユルゲンスはこの發明の將來に期待をもち、ムリーの得た特許を購入してオス工場を設け初めて人造バターを賣り出した、マルガリンの名はムリーの師で石鹼史上に其名を知られた化學者シエプロエーの發見したマルガリーネ酸といふ脂酸から出た名で希臘語で眞珠といふ意味である、ユルゲンスの死後同社は好調に發展し、同時に和蘭のファン・デ・ベルグに設立の生産會社も經營宜きを得て十九世紀の末

に右の兩社はマルガリン界の指導者となつた、そこでこの兩社はライン沿岸の工業労働者地帯にマルガリンを供給し彼等も亦其最も大得意となつた、そこで一八八八年獨逸政府はマルガリンの輸入に關稅を加へたので、右兩社はライン地域で其生産を行ふ會社をつくることとなり、ゴツホヤクレーブに兩社の支工場が出来、同時に英國への市場開拓をすゝめ一八九〇年オスの原の工場を閉鎖してロツテルダムに移轉した、ついで各國のマルガリン消費階級が増加しだしたので、前記兩社は歐洲の全工業國に生産工場をつくり、二十世紀に入ると大規模の油房、精油工場を經營し、更に容器製造業及び運送業に手を出し漸次綜合的大コンツェルン陣容を具備するに至つた。かくて一九二七年には兩者共に合併してマルガリン・ユニオンとなつて統一ある市場政策に出ることとなつた。

合併と同時に合理化を行ひ、マルガリン工場と石鹼工場と共に整理され東歐に於けるハルトツクス社をも合併してしまつた。

マルガリンはバター生産者を脅かすといへども一面農村家畜に必要な高級飼料としての油槽を多量に供給するから、農家も其恵をうける、且マルガリン會社自身も多量の牛乳を原料として買うから、兩者の生産量の比率を妥當ならしめてその軋轢をさくることが出来たのである。